タイトル	勝利至上主義に対する批判の反証：スポーツの定義と価値から
著者	関，朋昭； Seki, Tomoaki
引用	北海学園大学経営論集，17(3)：117-129
発行日	2020-03-31

勝利至上主義に対する批判の反証

— スポーツの定義と価値から —

関 朋 昭

1. はじめに

勝利のためには手段を選ばず。このような行為は勝利至上主義と呼ばれ「結果としての勝利が重要なのか、あるいは結果にいたる過程が重要なのか」といった問題が議論されている（岡部，2017）。大峰・友添（2014）によれば「勝利至上主義という用語については、論者が厳密な定義を行わず、その意味内容については曖昧さを残したまま使用されるケースが多いという。「勝利至上主義」という言葉は、スポーツの世界で使用される語彙であり、広辞苑などの一般的な辞書には掲載されていないことへの注意が重要である。

例えば、神谷（2015）は勝利至上主義とは、「勝つこと以外の（あるいは勝つことをめぐる）教育内容が具体的に明示・意識されていないで、指導や活動が行われている状態」とし、勝つことをめぐるプロセスの重要性を示唆している。それはすなわち生徒たちの「自治」の大切さである。また、大野（2017）は、大学運動部における中核的な価値観である勝利至上主義を緩和させるためには「競技者の倫理」と「学生の倫理」を調和させていくことを説き、部員の話しあい、考える余地をもつことができるような運営のあり方を見直していくことを示唆している。彼らは、勝利のみを目指す価値観や考え方を勝利至上主義と捉え批判している。勝利至上主義に対する批判である。

一方、関（2015）は「善し悪し」の基準がない勝利至上主義を、自分たちの価値観にとって都合が「良い悪い」で判断している、という知見の欠如を問題視している。さらに「勝利至上主義が欠如した『スポーツ』は空虚である」と述べ、また川谷（2008）は、競技スポーツは本質的に競争という側面を持っており、競技スポーツに参加する者は勝利という結果を追求せざるを得ないと述べている。勝利を重視することを肯定している。彼らは勝利至上主義に対する批判の批判である。

このように論者によって「勝利至上主義」を非難する立場になったり、「勝利至上主義」を否定すればスポーツは成り立たないという立場になったり、そもそも「スポーツ」をどこに捉えるかで、多様な議論へと拡散してしまうことを改めて理解することができる。関根（2013）や神谷（2015）は勝利至上主義の是非を論じると水掛け論、不毛な議論になることを危惧しているが、本研究ではそれを克服したい。

以上、何を視点にするのかで勝利至上主義の議論が分かれる。そこで本研究の目的は、はじめに勝利至上主義を議論する上で不可欠な「①スポーツの定義を改めて検討する」、次に「②スポーツの価値を改めて検討する」、そして「③スポーツ原論を提唱する」、最後に「④勝利至上主義に対する批判の反証」を証する。ひいては冒頭の命題「勝利のためには手段を選ばず」の意味を改めて考えてみたい。

2. スポーツの定義

2.1. 先行研究のレビュー

まず、スポーツの概念と定義を改めて検討する。さしあたり「概念」と「定義」の区別が必要である。哲学に依拠すれば、「概念」とは「一つにして掴まれたもの（ラテン語の conceptum）」や「把握する（ドイツ語の Begriff）」のように、概念とは複数の事物や事象から共通の特徴を取り出し、それらを包括的・概括的に捉える思考の構成単位を意味する（赤松, 2015）。他方、「定義」とは、広義には言葉や物事を明確に規定し説明することを目的とした手続きであり（中畑, 2017）、「X

とは何であるのか」つまり「A = B」の形式をとる。さらに哲学の体系から詳しくみていくと、実は「概念」と「定義」のどちらからも、きわめて多様な見解が存在し、今日まで議論の終わりはみえていない。つまり真理が無いのである。このような背景から、どうしてもアドホックな研究の視座が必要になるというのが、本稿の積極的主張である。そこで本研究では、一般的かつ普遍的な解釈を前提として、「概念」は認識、「定義」は論理として区別し捉えていくことにする。

さて、スポーツの概念と定義であるが、まずは友添（2009）の研究に注目したい。その理由は二つある。一つ目は、スポーツと深く

表1 スポーツの概念と定義 —友添秀則の研究より—

スポーツの概念	
Diam, C.	スポーツとは遊びがルールに規制されて競争されたものである。
Coubertin, P. de	進歩への欲求に立ち、危惧を冒しても先に進もうとする集中的な筋肉の努力に対する自発的で日常的な信仰である。
Lüschen, G.	スポーツとは身体的な技術を用いる活動である。
Edwards, H.	スポーツとは身体的努力の発揮する強調する活動である。
Roy, J. W.	スポーツとは身体的卓越性を表す活動である。
Weiss, P.	スポーツとは身体的卓越性をめざす人たちが示す、ルールによって伝統化されたひとつの形式である。
Keating, JW.	スポーツの本質は競争だが、「競技 (Athletics)」とは反対に、穏やかさや寛大さとともに楽しさの特徴をもつ。
Gillet, R.	スポーツとは遊戯、闘争、激しい肉体活動の3つの要素で構成される身体活動である。
Traleigh, W. P.	スポーツとは同意したルールの下で、身体的卓越性を相互に追求することである。
Guttman, A.	現代のスポーツを特徴づけるメルクマールとして「世俗化」「競争の機会と条件の平等化」「役割の専門化」「合理化」「官僚的組織化」「数量化」「記録万能主義」を挙げた。
友添秀則	近代スポーツが保持してきた資本の論理、自由競争の論理、平等主義の論理、禁欲的な論理、モダニズム等のスポーツ独自の論理を中核にしながら、人類が長い歴史的過程の中で醸成されてきた可変性をもった人間の身体運動に関わる文化の総体である。
スポーツの定義	
広辞苑	スポーツとは陸上競技、野球、テニス、水泳、ボートレース等から登山、狩猟等に至るまで、遊戯、競争、肉体的鍛錬の要素を含む身体運動の総称である。

(注1) 友添（2009, p. 31）をもとに筆者が加筆修正した。

(注2) 友添（2009, p. 56）による「定義」とは、ある「概念」の内包と外延を確定したものであるとし、辞書、辞典類において示されたものである。

関係する「体育」「教育」の概念と定義を哲学的な態度から詳細に検討していること、二つ目は、古今東西における論者の議論を整理し、スポーツの概念化を成し遂げていることである。表1が友添の研究成果をまとめたものである。

表1の「スポーツの概念」の各論者の記述部分を概観すると「スポーツとは何か」という問いに対して、多くの読者はスポーツの輪郭を認識できるであろう。これが概念の良さである。しかしながら、この「スポーツの概念」を一瞥すれば「定義」にもみえる。その理由は、「スポーツとはXXである」の論理的な記述(A=B)だからである。そのため友添(2009)は、辞書、辞書類に示されたものを「定義」とし、「概念」と「定義」の混同を避け、スポーツの概念化のみに注視している。それゆえに友添の研究ではスポーツの「定義」は不在である。また久保(2010, pp. 14-18)はKeating, J. W.の議論から、「スポーツ(S=sports):楽しみに方向づけられた活動」と「スポーツ(A=athletics):勝利に方向づけられた活動」のふたつに分け、その分岐はスポーツの価値を、スポーツの実践する者によって変わり得る相対的なものであると考えている。同様に大橋(2011, p. 151)も「遊戯的スポーツ(Play)」と「競技スポーツ(Athletic)」に分けて検討している。このようにスポーツを分ち書き取る概念的な議論は多く散見するものの、「スポーツ」それ自体を説明する定義づけの議論は皆無に等しい。次に、スポーツ科学辞典(社日本体育学会監修, 2006)より、スポーツの概念と定義を概観する。

表2の上段部分はスポーツ(sport)で下段部分はスポーツ(sports)である。これからも分かるように、何が定義で何が概念か判然としない。かつ矛盾がある。例えば、上段部

分の①「プロフェッショナルスポーツ(実利的)」に対して②「ウォーキングやジョギングなど、非実利的な身体活動であればスポーツ」は矛盾する。また①の歴史性の「社会的な認知を得るまではあくまでもスポーツ的活動であって、スポーツとはいえない」とあるが「社会的な認知を得るまで」とは不得要領な記述である。さらに③のチェスは「特殊な使われ方であってスポーツの一般的な意味ではない」と断言しているが、その根拠が不明瞭である。

下段部分では「××・スポーツ」の一例を紹介しているが、スポーツは「する」だけではなく、「観る」「支える」「賭ける」など様々な機能を有していることが分かる。そこでスポーツにかかわる人(人間)を考察するために「スポーツマン(sportsman)」を辞書から検討する。特にスポーツは外来語であるため、複数の英和辞典を用い、日本語の辞書は広辞苑、スポーツ科学辞典を選定し表3にまとめた。その結果、英語辞典と日本語辞典では大きく意味が異なっていた。英語辞典では、狩猟、魚釣りをする人のことをスポーツマンと捉えていることが分かった。この意味は、スポーツ科学辞典では丁寧に解説されており、その一部分を紹介すれば「16-17世紀のイギリスでは、狩猟は国王・貴族(=特別に選ばれた者)による余暇活動(=ハレの日の行為)だった(社日本体育学会監修, 2006, p. 378)」がある。またスポーツマンには博徒、賭博者なども含まれる。刮目すべきは、「勝負にこだわらない人(リーダーズ英和辞典)」であるが、この含意はスポーツを純粋に嗜好する「愛好家」のことをさしているものと推察される。この精神性は、スポーツマンシップ、アマチュアリズムの根源である。ただし、表2の下段部分でみてきたように、スポーツには多種多様な機能があり、それにかかわる人(人間)の価値観も多様性をもつ。これらの意味を整理するためにも「スポーツマン」と

表2 スポーツの概念と定義 —スポーツ科学辞典より—

スポーツ sport (服部豊示が執筆, pp. 448-449)

スポーツという言葉には大きく3つの意味がある

①スポーツとはルールに基づいて身体的能力を競い合う遊びの組織化、制度化されたものの総称を意味する
 いいかえれば、遊戯性、競争性、身体活動性、歴史性という4つの要素によって特徴づける文化形象
 ただし、上述の4要素の比重にはかなりの幅がある

遊戯性…プロフェッショナルスポーツや競技スポーツは遊びの要素はあまり重要ではない

競争性…健康スポーツや生涯スポーツにおいてはむき出しの競争心は嫌われ、穏やかさや友愛が好まれる

身体活動性…ラグビーのように汗だくになるスポーツもあれば、アーチェリーのように身体を揺れを抑え
 安静時以下の拍動に静めようとするスポーツもある

歴史性…社会的な認知を得るまではあくまでもスポーツ的活動であって、スポーツとはいえない

②健康の保持増進や爽快感などを求めて行われる身体活動のことを指してスポーツと呼ぶことがある
 ウォーキングやジョギングなど、非実利的な身体活動であればスポーツと呼ぶ

③知的な戦略能力を競い合う遊びを指してスポーツと呼ぶことがある

チェスや将棋は頭脳のスポーツと呼ばれている。歴史的にも、産業革命以前のイギリスではチェスもスポ
 ーツの1つとして捉えられていた。ただし、現代においてはあくまでも特殊な使われ方であって、スポーツの一
 般的な意味ではない。

スポーツ sports (稲垣正浩が執筆, pp. 449-452)

スポーツの起源は「労働」と「遊び」に求められてきた。すなわち人間の本質は労働にある、あるいは人間の
 本質には遊びにある。

スポーツは文化である以上、それぞれの時代や社会が求めたコスモロジーや時代精神に応じて、さまざまに
 姿形を変えてきた。古代には古代の、中世には中世の、そして近代には近代のスポーツが華ひらいた。

以下は、スポーツ科学辞典に記載されている「××・スポーツ」と称する一例である。

「ヴィジヨナリー・スポーツ」「ギャンプル・スポーツ」「競技スポーツ」「儀礼スポーツ」「スペクテイター・ス
 ポーツ」「民族スポーツ」「メディア・スポーツ」など

(注1) (社)日本体育学会監修(2006)のpp. 448-452の「スポーツ」に関するものを筆者がまとめた

(注2) 上段の「スポーツ sport」の下線部分は筆者である

表3 スポーツマンの辞書的意味

ジーニアス英和辞典 第5版	1. スポーツマン, スポーツ愛好者, 運動家。《戸外スポーツ, 特に狩猟・釣り・ 乗馬などを愛好する人で, 日本語の「スポーツマン」とはずれることもある》 2. スポーツマンシップを持っている人, 正々堂々とした人
リーダーズ英和辞典 第3版	1. スポーツマン, 運動好きの人, スポーツマン精神をもつ人, 正々堂々とやる人, 勝負(などに)にこだわらない人 2. 《古》競馬師, 博徒
ランダムハウス英和大辞典 第2版	1. スポーツマン, 運動家: 特に狩猟, 魚釣り, 競争のような野外スポーツをする人 2. (公平さなどの) スポーツ精神を持った人 3. 《古》(特に競馬の) 賭博者, 博徒, 勝負師
広辞苑 第六版	運動競技の選手。またスポーツの得意な人
スポーツ科学辞典	スポーツマン自体の説明は無し ただし「狩猟」のところで「スポーツマンとはこういう人たち(=狩猟家)をさす 用語である」という記述がある (p.378)

いう概念を抽象化する必要がある。そこで本研究では、スポーツ (sport) にかかわり合う人 (人間) のことを「スポーツマン (sportman)」と定義し、辞書的な意味でのスポーツマン (sportsman) とは弁別する。尚、「man」は男性をさすのではなく「人 (人間)」を示している。

以上より、われわれは「スポーツとは何か」を議論するための定義を必要としている。つまりはスポーツの根本になる原論 (根本となる理論) が要請されている。

2.2. スポーツの定義づけ

本研究におけるスポーツの定義づけであるが、表1のスポーツの概念を数学の定義づけに倣い抽象化する。すなわちスポーツの共通した認識を論理として捉えるために、具体的な特徴は捨象する。例えば、「身体」「活動」は、人間が何かしらの行為する際には、必然的に身体を用いて動くため、そうした意味では掃清、調理、建築などもスポーツと成りえるし、これらには「技術」「卓越性」も包含される。つまり何でもかんでもスポーツになってしまう。だからこそ、スポーツを論じるためには、定義が必要である。先行研究が示してきたように、スポーツの定義づけの困難さを認めたと上で、本研究は数学すなわち構造主義を用いて定義づける。

スポーツとは、(1) から (5) を満たすものである。

The sport meets the conditions from (1) to (5).

- (1) 完結性…開始と終了で閉じている
- (2) 競争性…勝利を求めて二人以上で競う
- (3) 規則性…スポーツマン同士が同意したルールとレギュレーションから成る
- (4) 自主性…自主的である

- (5) 完備情報性…不完備情報ゲームは含まない

この定義に基づいて、本研究におけるスポーツの意味解釈を次に整理しておきたい。

(1) 完結性の条件は、スポーツは任意の開始と終了で閉じていることを意味し、野球の「プレイボール/ゲームセット」、徒競走の「スタート/ゴール」などである。例えば「ラジオ体操」も開始と終了の音楽で閉じているので、一瞥すればスポーツと言えるが、次の(2)の条件より棄却される。

(2) 競争性の条件は、勝利を求めて二人以上で競う活動のことであり、「競争 (competition)」とは、闘争と協調の中間に位置づけられ、元来、複数のスポーツマンが一定の明示的・非明示的ルールの下で何らかのマナーを守りながら勝利を求めて競うことを意味する(島津格, 2015)。このように定義することによって、先の「ラジオ体操」がスポーツではないことを証した。また二人以上という定義より、「一人で登山する」「一人でベンチプレスのトレーニングをする」「一人で泳ぐ」「散歩する」「スキーをする」などの活動はスポーツに含まない。これらは運動(活動)である。それでは、「戦争」はスポーツと言えるのであろうか。次の(3)の条件からの吟味が求められる。

(3) 規則性の条件は、スポーツマン同士が同意したルールとレギュレーションから成る活動のことであるが、まずは「ルール (rule)」と「レギュレーション (regulation)」の違いを確認する。辞書的な意味では、「ルール」は「規則、規定、きまり」、「レギュレーション」は「取り締まり、規制、規則」と同じ含意であるが、スポーツにおいて「ルールブック」とは言うが「レギュレーションブック」とは言わず、また「ルール違反」とは言うが「レギュレーション違反」とは言わない。つまり「ルール」は競技全体に関わる部分で、その中

でも特に道具、交代人数、試合時間などの仕様に関する部分がレギュレーションである。具体的には、野球における「木製バット／金属バット」、バドミントンにおける「A社製シャトル／B社製シャトル」、サッカーにおける「最大交代人数」「試合時間／PK戦の有無」などのことである。既述で問題提起した「戦争」では当事者の同意の有無もさることながら、兵士数、武器の規制などレギュレーションが無いことから、(3)の条件よりスポーツには該当しない。さて「裁判」はどうかであろうか。

(4)自主性の条件は、あくまでも自主的である。「自主」の定義を施すことさえが相当の困難を伴うが、取り敢えず辞書的な意味は「他からの干渉や保護を受けず、独立して行うこと」である。まずはスポーツと同義に扱われる学校教育における「体育」から、この条件を検討してみたい。小学校、中学校、高等学校における「体育」は必修のカリキュラムであり、履修に対して自主性を問われることはなく強制である。しかしながら、「体育」が好きな生徒にとっては自主性を伴う活動となりスポーツのように見える。しかしながら、「体育」は正規カリキュラムであるがゆえに、学業成績が付与され干渉を受けるためスポーツではない。ただし、「或る体育」の授業内の「或る時間帯」において、(1)から(5)の条件を満たすバスケットボールの試合を行う際、その「或る時間帯(空間)」は「スポーツ」である。つまり「体育」には「スポーツ」を包含する空間(時間帯)があるといえる。さて、「裁判」であるが、訴えられた被告人は本人の「同意」ではなく、法(無条件)の強制による出廷が義務づけられ自主的ではない。ゆえにスポーツではない。

(5)完備情報性の条件は、必要となる情報が完全に備わっており可視化できることである。不完備情報ゲームはスポーツに含まない。不完備情報ゲームとは、相手の取りうる戦略

や利得関数が分からないゲームのことである(例えば鈴木, 2016を参照)。スポーツは、お互いの情報(例えば、スターティングメンバー、バックアップメンバーなど)が、全てのスポーツマンに完備された情報のもとで競うから公平性が備えられている。つまり「スポーツ」は「完備情報ゲーム」でなければならないというのが、本研究の積極的な主張である。そうした意味において、「麻雀」「花札」「ポーカー」「ボードゲーム」などはスポーツに含まない。その理由は、これらのゲームは(1)から(4)までの条件を満たしているものの、運／不運の要素が強いからである。むしろ、スポーツには少なからず運／不運が付きまとうため、不完備情報ゲームをスポーツの条件に認める議論があっても良いし、それを否定することもできない。同様に、本研究のスポーツの定義も完全に否定することはできない。絶対的な定義などは存在せず、定義とは恣意的で操作的であることこの理解こそが大切である。

先述した通り、スポーツと遊びは相性が良く、カイヨワ(Roger Caillois, 1931-1978)の研究は、スポーツの研究者には多く支持され引用づけられている。「スポーツは遊びか否か」の議論に備え、本研究と比較し検討する。カイヨワ(1990)の有名な「遊び」の基本的な定義は以下の6つである。

1. 自由な活動…遊戯が強制されないこと
2. 隔離された活動…あらかじめ決められた明確な空間と時間の範囲内に制限されていること
3. 未確定な活動…ゲーム展開が決定されていたり、事前に結果が分からないこと
4. 非生産的活動…財産も富を含め、いかなる種類の新要素も作り出さないこと
5. 規則のある活動…約束ごとに従うごと
6. 虚構の活動…日常生活と対比した場合、

表4 「遊び」と「スポーツ」の対応づけ

ロジェ・カイヨワ 遊びの定義	本研究 スポーツの定義
1. 自由な活動	(1) 完結性
2. 隔離された活動	(2) 競争性
3. 未確定な活動	(3) 規則性
4. 非生産的活動	(4) 自主性
5. 規則のある活動	(5) 完備情報性
6. 虚構の活動	

明白に非現実であること

カイヨワの遊びの定義と本研究のスポーツの定義を対応づける。

対応づけられなかったのは、遊びの定義の「4. 非生産的活動」「6. 虚構の活動」、スポーツの定義の「(5) 完備情報性」の三つである。一つ目の「4. 非生産的活動」であるが、スポーツそのものの中には「生産/非生産」は問わない。後述するスポーツの価値と関わるが、あくまでもスポーツを道具立てとした場合、どのように扱うのかはスポーツマンに委ねられる。二つ目の「6. 虚構の活動」であるが、これもスポーツそのものの中では「日常/非日常」は問わない。スポーツを生業とするプロフェッショナルなスポーツマンは、「スポーツならびにスポーツ的活動(次節で議論)」の時間の方が日常時間よりも長く、何が「日常/非日常」は曖昧である。三つ目の「(5) 完備情報性」は、スポーツには含まれるが「遊び」には含まれていない。この決定的な理由は、「遊び」の分類にはアレア (Alea) という「遊戯者の力の及ばぬ独立の決定の上に成りたつすべての遊び(ロジェ・カイヨワ, 1999, p. 50)」、すなわち「運(luck)」を許容しているからである。既述したようにスポーツそのものの中にも「運」の

要素は多少なりとも入り得るが、その要素をスポーツマンが可能な限り克服できるように条件がスポーツには付与されている。例えばカードゲームにおいては、配給されたカードの種類によっては技術よりも運が勝ることが多々ある。同じようにスポーツにおいても「組み合わせ抽選会」などは「運」の要素が伴う。しかしながら、スポーツではスポーツマンの努力で「シード権獲得」「予選免除」などの優遇を獲得することが可能である。そのためスポーツの定義では、「運」の要素をコントロールするための「(3) 規則性: レギュレーション」があり、「遊び」とは峻別される。

2.3. 練習とスポーツの差異

本節の主題は、練習はスポーツに含まれるかである。はじめに「練習」の定義であるが、川谷(2013, p. 786)に依拠すれば「練習とは、試合で勝つための手段として行われる活動」であるとし、次の性質があることを原理的・哲学的に考察している。「練習」の原論である。

1. 非完結性…練習は試合があつてはじめて完結するのであって、練習自体では自己完結できない
2. 不確実性…今やっている練習が「よい練習」かどうかは、試合になってみないとわからない

3. 偏在性…食事や睡眠というような活動も、競技者にとっては練習になりうる
4. 非自己目的性…練習それ自体は自己目的ではあり得ない、自己目的になってしまったらそれはもはや練習ではない
5. 派生性…練習は試合から派生する活動である
6. 墮落傾向性…練習はややもすれば「練習のための練習」に墮落するという傾向をもつ
7. 更新性…常に「よりよい」、新しい練習方法がありうる
8. 原理的不要性…原理的にやらなくてもよい活動

川谷の「練習原論」と本稿の「スポーツの定義」を照らし合わせてみれば、「練習」は「スポーツ」に含まないことが分かる。例えば、野球の「キャッチボール」はあくまでも「練習」であって「スポーツ」には成り得ず、食事や睡眠も「練習」の一部かもしれないが「スポーツ」それ自体ではない。「練習」はあくまでも「練習」であり、スポーツと境を接する活動は「スポーツ的活動」である。

川谷の議論においても実は「スポーツ」の定義が無い。どうやら川谷は公式試合をスポーツと捉えており、「練習試合（目的：強くなること）」と「公式試合（目的：強さを決定すること）」を区別しうる唯一の契機は目的だと述べている。しかし、厳密に言えば「練習試合」と「公式試合」の目的の違いも微妙である。「練習試合」であっても強さを決定する真剣勝負の場があり得るし、「公式試合」であっても既に順位が決定した後の試合は消化試合と化し、真の強さを決定するには至らない試合もある（例えばリーグ戦の最終戦など）。本研究の視座からいえることは、「練習試合」「公式試合」のどちらであっても、スポーツの定義が充足された活動であれば「スポーツ」である。

3. スポーツの価値

3.1. 先行研究のレビュー

価値とは、広い意味では「善いもの」ないし「善い」といわれる性質のことである。価値という語は、一般的には、価値と反価値（「悪いもの」ないし「悪い」といわれる性質）を含んでいる（泉谷，2015，p.242）。岡山（1997a, 1997b, 1997c）は、価値の本質を定義することは極めて困難であることを説きつつ、「価値とは、人間が、意識的、もしくは無意識的に、自他の思慮と認識の対象に看取する『よさ』、ないしは『のぞましさ』である（岡山，1997c，p.304）」と提唱している。すなわち、価値とは、何かしらを基準とした「善さ／よさ」といえるであろう。

スポーツの価値に関する研究は、例えば中西（2012a）によれば「個人的価値」「教育的価値」「社会・生活向上価値」「経済的価値」「鑑賞的価値」といった6つの価値体系（構造）から構成されることを明らかにし、さらに新しい価値として「環境的価値」を加えた7つの価値体系を示唆している（中西，2015）。この学術的な背景には、スポーツの外在的価値と内在的価値の2元論がある。中西（2012a，p.48）は、スポーツ政策経営においては政策評価や施策評価だけを優先するあまり、スポーツの外在的価値を基調とした政策（82.2%）が多く、スポーツの内在的価値を基調とした政策（17.8%）は少ないことを挙げ、あくまでもスポーツの内在的価値の「不易」を重要視し、スポーツの外在的価値は「流行」として副次的に取り入れながらバランス関係を維持・形成していくことの重要性を説いている。

川谷（2015）は「『勝利至上主義』ないし『勝利第一主義』とは、勝利に最上の価値を見出す価値観のことである」と定義している。水上（2006）によれば「スポーツのもつ文化的諸価値を下位価値にしりぞけて、競技ス

スポーツの勝利が上位価値であることを重視する考え方を勝利至上主義と示している。神谷(2015)の定義は既述した通りである。「勝利の追求」という概念もある。久保(2010)は「競技集団はスポーツにおいて『勝利を追求する』ことをその『実在理由』として存在している。競技集団において暗黙のうち知られ理解されている『為すべきこと』とは『勝利の追求』であり、それが暗黙の価値として成員の行為を規制している」ことを指摘している。関根(2013)は勝利至上主義を、スポーツ以外の価値を手に入れる過程で勝利を唯一の目的として振る舞うという意味として規定し「勝利の追求」と区分している。岡部(2018)は、1970年代から1980年代前半にかけて、それまでのスポーツのあり方を反省的に捉えた「近代スポーツ批判」として勝利至上主義が生成したのではないかと論じている。以上の先行研究をまとめると次になる。

1. スポーツには内在的価値と外在的価値があること
2. 価値には優劣があること
3. 勝利至上主義は批判されていること

3.2. スポーツにおける価値の批判的再考

まずは本稿のスポーツの定義を再確認するが、定義には主観的な要素は一切無い。つまり、スポーツとは爽快感、健康の保持増進、青少年の健全育成、国際的な友好と親善への寄与、夢や感動等々の曖昧な記述を入れていない。主観によって議論が可能となるのは定義ではなく、定義から導き出された現象に対してのみだけである。そうでなければただの水掛け論となる。ゆえに、本研究のスポーツの定義は、数学を用い抽象化させているので、遍く議論することが可能である。

さて、果たしてスポーツには「内在的価値」と「外在的価値」があるのかを最初に考察していく。スポーツ哲学、スポーツ社会学の2

名の論考を手掛かりにしたい。

久保(2010, p.17)は、ある固定的な意義(価値)を有する「スポーツ(S)」、「スポーツ(A)」なるものが存在するのではなく、「スポーツ」によって「楽しみ」や「勝利」という意義(価値)が実現できるのである。よって、「スポーツ」の指導において重要なことは「スポーツ自体がある特定された意義(価値)をもっており、それを実現すること」ではなく、「スポーツによって、個々人にとって何らかの意義(価値)を実現させるようにすること」であると言える(傍点は筆者)。

菊・茂木(2015, p.41)は、スポーツを評価するための価値基準は、「何の役に立つのか?」という手段的なものばかりであった。しかし、スポーツを一つの洗礼された文化として捉えるならば、役に立つか否かを問うのは極めておかしな話である。なぜなら、我々は芸術を鑑賞する際に「この作品は何の役に立つのか?」などという問いを発したりしないし、そんな疑問を発すること自体が奇妙なことであると受け止めることができるからだ。「この作品はこれ自体として大事なものである」という内在的な価値が、鑑賞する側にも共有されている。極論すれば、それ自体は何の役にも立たない無価値なものが文化なのである。スポーツも「どちらが強いかわるか」「どちらが速いか遅いか」などの結果の差異は明確に示すものの、実は無色透明な無価値なものに等しいといえる(傍点は筆者)。

功利主義の創始者であるベンタム(Jeremy Bentham, 1748-1832)は、世の中で「内在的価値」を有するのは幸福のみであり、それ以

外のもは幸福になるための手段として「道具的価値」をもつに過ぎないという立場をとる。経済学においても、ロック（John Locke, 1632-1704）やヒューム（David Hume, 1711-1776）の価値論は、貨幣に絶対的な価値あるいは内在的価値をもつことを否定している。久保（2010）、菊・茂木（2015）の論考は、どちらもスポーツに内在的価値を認めない相対主義である。一方で、中西（2012a）などにみられるようにスポーツ自体に内在的価値を認める絶対主義を説く者も少なくない。相対主義と絶対主義のどちらの立場を志向するにしても、そこで主張する論理には限界があり、常に相即的である。とはいえ、本稿の議論が空虚にならないために、「スポーツの定義」から「スポーツの価値」を批判的に再考すれば、以下の命題を導き出すことができる。

スポーツは無価値であるがゆえに価値がある。
Sport is worth because it is worthless.

この命題からいえることは、スポーツ自体は無味乾燥であるため、スポーツマンが多種多様な価値を創ったり、発見したりすることが可能である。例えば中西（2015）の7つの価値体系においても、いくつかの価値を組み合わせることによって新たな価値をさらに創出することができる。中西（2015, p. 48）が指摘し重視するスポーツの内在的価値を「不易」としているが、この「不易」こそが「無価値」である。「無価値（worthless）」とは、内在的価値か外在的価値かのどちらかを問うたり、どちらが優劣かと問うたりできるものではなく絶対的かつ普遍の価値を有する。相対的かつスポーツマンによって異なる実用的な value（価値）とは区別しうる。上記の命題へさらに丁寧に説明づけると以下の記述となる。

スポーツの価値は境界がないからこそ価値づけることができる。

Sport can be worthy because the worth of sport is borderless.

スポーツの定義の1つに「競争性：勝利を求めて二人以上で競う」があるが、人間の活動である以上、純粋に勝利だけを求めることは絶対に不可能であり、必ず「何かしらの目的／価値」が随伴する。また、スポーツの内在的価値に捉えられている「遊戯」「遊び」などにおいても、マズロー（Abraham Harold Maslow, 1908-1970）の欲求階層説に倣うまでもなく、「何かしらの目的／価値」を忌避できない。スポーツを「する」「観る」「稼ぐ」など、スポーツマンにとっては「何かしらの目的／価値」が必ず存在するということである。

スポーツにおいては「スポーツを通じた人格形成」「スポーツで培う人間力（例えば畑, 2017）」などの指導理念を掲げる指導者が実に多い。また吹奏楽においても「金賞よりも大切なもの（例えば山崎, 2009）」があるといい、スポーツを道具立てとし、その向こう側にある何かを求めてスポーツマンになっている。その「何かしらの目的／価値」は形而上で、その問いの追求は最終的にはプラトニズム（Platonism）に帰結する。ゆえにスポーツの価値はスポーツマンの哲学、倫理観の創作に委ねられている。

4. スポーツ原論

ここまで「スポーツの定義」と「スポーツの価値」について考察してきた。以下、本研究のインプリケーションを記す。すなわちスポーツ原論である。

- a) スポーツとは、「(1) 完結性」「(2) 競争性」「(3) 規則性」「(4) 自主性」「(5) 完備情報性」である。
- b) スポーツは、無価値である。

a) より、スポーツは勝利至上主義でなければ成り立たないことを証した。勝利至上主義が批判の標的になるのではなく、本来はスポーツマンがもつ目的／価値が評価され批判されるべきである。なぜならば、b) スポーツは無価値であり、スポーツに何かしらを価値づけるのはスポーツマンだからである。スポーツの世界では「過度な勝利至上主義」が不祥事、体罰、ハラスメントの諸悪の根源とみられるが、スポーツマンの^{よこしま} 邪な目的／価値の射貫きこそが本来は求められるべきであろう。

「勝利至上主義」はスポーツ界の言葉である。「勝利至上主義」の英訳は「win at all costs (水上, 2006, p. 823)」と訳づけられているが、本研究の知見から「勝利至上主義」の英訳を改めて検討してみたい。関 (2015, p. 11) によれば、Fuoss, D. E., and Troppmann, R. J (1981) は「win at all cost (いかなる犠牲を払っても勝利する)」という戦略は、勝つためには手段を選ばず、勝つためには不正も辞さないという論理となり、観るものもそのような推測が働き、Scott, J (1973) は勝利を絶対視する倫理として「Lombardian Ethics (ロンバルディアン倫理)」などがあることを紹介している。勝利の英単語には、win, victory, dominator, triumph などがあるが、本研究の議論から、勝利至上主義を「Winnism」と訳づけたい。その理由は、辞書によれば、victory には「戦闘や戦争での勝利や戦勝」の意味を含み、dominator には「支配、統治」の意味を含み、triumph には「勝利、征服、偉業」など戦争に関する意味を含んでいる。これらの英単語は勝利に随伴し、他の価値／目的を含んでいる。一方、win は「競争などで1着になる (動詞)、勝利を得る (名詞)」の意味であり、反意語は lose である。スポーツは勝利を生む一方、翻って敗北を生むことから反意語がある意味は大きい。以上より、「win (勝利) + 主義 (ism)」の「勝利至上主義 (Winnism)」

の英訳を与えることが妥当であると本研究は考えた。

以上、勝利至上主義 (Winnism) に対する批判は、スポーツの定義と価値の考察から反証される。

5. おわりに

「勝利のためには手段を選ばず」、この文章には主語がない。行為の主体が明確ではないので、「スポーツマンは勝利のために手段を選ばず」とし、スポーツ原論から最後に考察してみたい。スポーツ原論は、①「スポーツ」とは「勝利至上主義」である (Sport is Winnism)。加えて②「スポーツ」は「無価値 (worthless)」である。

①より、スポーツでは「スポーツマンは勝利のために手段を選ばず」は真である。なぜならば、スポーツはそれが全てだからである。では、ドーピング行為については、スポーツ原論からどのような説明ができるであろうか。ドーピング行為は定義の「(3) 規則性」に反する手段であり、スポーツマン同士が同意したルールとレギュレーションに反することから、その手段を用いた時点で「スポーツ」という枠 (世界) からの逃走である。そしてスポーツマンでも無くなる。ドーピング行為という手段を選択肢の一つとして脳裏に浮かべるまではスポーツマンは担保されるが、行使した時点でアンスポーツマン (反スポーツマン unsportman) である。勝利を実現するための手段はいくつもある。

②より、「スポーツを通じた人間形成 (価値)」と言いながら、練習において体罰暴言などを振るう等々 (行為)、スポーツマンの価値と行為の不一致はスポーツ原論からどのような説明ができるであろうか。「練習はスポーツではなく、スポーツ的活動である」の原論の確認がまずは重要である。スポーツ的活動における価値は、スポーツマンの「倫理観」

「考え方」に委ねられているがゆえに、スポーツマン同士（例えば、コーチと選手）の価値観に相違が生じることは珍しくない。つまりそれは「勝利」に随伴する「価値」がスポーツマン同士で異なるからである。例えば、コーチは勝利に随伴する「名声名誉（承認）」を欲し、選手は「友達との友好（愛情）」を欲する場合、スポーツ（勝利）はスポーツマン同士の蝶番ではあるが、価値の実現のための手段は異なる。すなわち、スポーツ自体は何とも空疎であるが、それゆえにスポーツマンはスポーツを利用し様々な「価値」をつくり、手段を選ぶことが出来るのである。価値を実現するための手段はいくつもある。

スポーツマンであれば、最適となる手段を吟味し、その上で顧慮した行為を行うはずである。優れたスポーツマンは「勝利のためには手段を選ぶ（択ぶ）」もしくは「勝利のためには手段を選べる（択べる）」が正しい意味だと本研究は考える。まとめると勝利至上主義に対する批判の真意はスポーツマンへの批判を含意している。

謝 辞

澤野雅彦教授退職記念号に寄稿できることを心より嬉しく思います。本研究の「勝利至上主義」は、拙筆した博士論文（2014年3月に学位取得）で、私と澤野雅彦先生で議論し続けた大切なテーマです。本稿は、その際に棚上げにした議論を改めて考え整理したのですが、内容的にはまだまだ不十分で、澤野雅彦先生からお叱りを頂戴するかもしれません。

澤野雅彦先生からの教えを忘れずに、Sawanoismを鑑み研究活動に邁進していくことをお誓い申し上げます。澤野雅彦先生との邂逅が私の人生を大きく変えました。ありがとうございました。

尚、本研究は、澤野雅彦先生と一緒に参加した「第42回体育・スポーツ経営学会（静岡

大学：2019年3月18日から19日）」にて筆者が発表したものを大幅に加筆修正したものである。

本論文は、2017年度から2019年度までの科学研究費（基盤研究（C）：研究代表者：関朋昭、研究課題／領域番号：17K04875）の「知識基盤社会と部活動をつなぐ理論的枠組みの構築」研究成果の一部である。

【参考文献】

- 赤松明彦（2015）「概念」。廣松渉編集『哲学・思想辞典（第7刷）』岩波書店、pp. 209-210。
- 泉谷周三郎（2015）「価値」。廣松渉編集『哲学・思想辞典（第7刷）』岩波書店、p. 242。
- 畑喜美夫（2017）『チームスポーツに学ぶボトムアップ理論 高校サッカー界の革新者が明かす最強の組織づくり』、カンゼン。
- 今村嘉男（1949）『体育とスポーツ』、体育（1）、pp. 19-21。
- 今村嘉男（1950）プロ競技はスポーツか、学校体育：2-5。
- 神谷拓（2016）『生徒が自分たちで強くなる部活動指導 「体罰」「強制」に頼らない新しい部活づくり』、明治図書出版。
- 神谷拓（2015）『運動部活動の教育学入門—歴史とのダイアログ』、大修館書店、p. 321。
- 川谷茂樹（2015）「勝利至上主義（スポーツにおけるその他の倫理的問題）」（中村敏雄・高橋健夫・寒川恒夫・友添秀則編集主幹『21世紀スポーツ大事典』大修館書店、pp. 827-828。
- 川谷茂樹（2013）「スポーツと『練習』—目的論的考察」、体育の科学 Vol. 63（10）、pp. 786-790。
- 川谷茂樹（2008）「勝利至上主義」加藤尚武編『応用倫理学事典』丸善、p. 856。
- 菊幸一・茂木宏子（2015）「第2章 スポーツ価値観への社会的探求」、木村和彦・菊幸一、以下12名（2015）新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発（第2報）。日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集Ⅲ、pp. 37-47。
- 木村和彦・菊幸一、以下12名（2015）「新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発（第2報）」、日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集Ⅲ、pp. 1-72。
- 久保正秋（2010）『体育・スポーツの哲学的見方』、

- 東海大学出版会。
- 松田徳一郎 編集 (1995) 『リーダーズ英和辞典第3版』, 研究社。
- 南出康世 編集 (2014) 『ジーニアス英和辞典第5版』, 大修館書店。
- 三戸公 (1994) 『随伴の結果—管理の革命—』, 文眞堂。
- 水上博司 (2006) 「勝利至上主義 win at all costs」(社) 日本体育学会監修『最新スポーツ科学事典』平凡社, pp. 823。
- 中畑正志 (2017) 「定義」, 廣松渉編集『哲学・思想辞典 (第7刷)』岩波書店, pp. 1103-1104。
- 中村敏夫 (1994) 『メンバーチェンジの思想—ルールはなぜ変わるのか—』, 平凡社。
- 中西純司 (2012a) 「文化としてのスポーツ」の価値, 人間福祉学研究 5 (1), pp. 7-24。
- 中西純司 (2012b) 「スポーツ政策とスポーツ経営学」, 体育・スポーツ経営学研究 26, pp. 3-15。
- 中西純司 (2015) 「第3章『スポーツ価値』のダイナミクスとスポーツ政策の課題」, 木村和彦・菊幸一, 以下12名 (2015) 新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発 (第2報), 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集III, pp. 48-61。
- 日本プロフェッショナル野球組織, 他5つの団体 (2018) 『公認野球規則』, ベースボール・マガジン社。
- 岡部祐介 (2018) 「スポーツにおける勝利追求の問題性に関する一考察:〈勝利至上主義〉の生成とその社会的意味に着目して」, 関東学院大学「自然・人間・社会」(65), pp. 15-37。
- 岡部祐介 (2017) 「勝敗の倫理学」(友添秀則編著『よくわかるスポーツ倫理学』ミネルヴァ書房, pp. 50-63。
- 岡山善政 (1997a) 「価値の本質に関する一考察(上):経営価値論の視座と方法を求めて」, 経営研究 10 (3), pp. 483-522。
- 岡山善政 (1997b) 「価値の本質に関する一考察(中):経営価値論の視座と方法を求めて」, 経営研究 11 (1), pp. 55-78。
- 岡山善政 (1997c) 「価値の本質に関する一考察(下):経営価値論の視座と方法を求めて」, 経営研究 11 (2), pp. 303-321。
- 大橋道雄 編著 (2011) 『体育哲学原論』, 不昧堂出版。
- 大峰光博・友添秀則 (2014) 「野球部における指導者の勝利追求への責任に関する一考察」, 体育・スポーツ哲学研究 (36) 2, pp. 73-82。
- 大野貴司 (2017) 「わが国大学運動部における『勝利至上主義』とその緩和策に関する一考察」, 東洋学園大学紀要 (25), pp. 105-121。
- 野中郁次郎 (1980) 『経営管理』, 日本経済新聞社。
- 関朋昭 (2015) 『スポーツと勝利至上主義』, ナカニシヤ出版, p. 139。
- 関朋昭 (2019) 「勝利至上主義批判に対する批判」, 体育・スポーツ学会第42回大会号, pp. 7-8。
- 関根正美 (2013) 「体罰の温床—勝利至上主義とフェアプレイの狭間」, 体育科教育, 61 (11), p. 38。
- 島津格 (2015) 「競争」, 廣松渉編集『哲学・思想辞典 (第7刷)』岩波書店, p. 344。
- 新村出編 (1998) 『広辞苑第五版』, 岩波書店。(社) 日本体育学会監修 (2006) 『最新スポーツ科学事典』, 平凡社。
- 小学館ランダムハウス英和大辞典第二版編集 (1993) 『ランダムハウス英和大辞典』, 小学館。
- 鈴木豊 (2016) 『ゲーム理論—契約理論』, 勁草書房。
- 高根正昭 (1979) 『創造の方法学』, 講談社。
- 田村圭一 (2001) 「功利主義と行為十分性の前提(制限的な結果主義の意義)」, 哲学年報 (48), pp. 15-27。
- 友添秀則 (2009) 『体育の人間形成論』, 大修館書店。
- 矢部京之助・斎藤典子 (1994) 「アダプテッド・スポーツ (障害者スポーツ学) の提言—水とリズムのアクアミクス紹介—」, 女子体育 (36), pp. 20-25。
- 山崎正彦 (2009) 『金賞よりも大切なこと—コンクール常勝校 市立柏高等学校吹奏楽部 強さの秘密』, スタイルノート。
- カイヨワ (1990) 多田道太郎 翻訳『遊びと人間』, 講談社。
- 鷺田康 (2019) 筒香嘉智「金属バットと勝利至上主義が野球少年を潰す」, 文藝春秋3月特別号, pp. 258-264。
- Drucker, P. F. (1993), *Management; Tasks, Responsibilities, and Practices*, Harper Business. (『マネジメント; 課題, 責任, 実践』(野田・野上監訳『マネジメント』上巻・下巻, ダイヤモンド社, 1974年。上田惇生訳『マネジメント』上巻・中巻・下巻, ダイヤモンド社, 2008年。))
- Fuoss, D. E., and Troppmann, R. J (1981), *Effective Coaching: A Psychological Approach*. John Wiley & Sons.
- Leiper, N. (1979) *The Framework of Tourism: Towards a Definition of Tourism, Tourist and the Tourist Industry*. *Annals of Tourism Research*. Vol 6, pp. 390-407.
- Scott, J (1973), "Sport and the Radical Ethic". *Quest (19)winter*, 71-77.
- Williams, B. (1995), *Replies*. (World, Mind, and Ethics. ed. by J. E. J. Altham and R. Harrison)